2005年４月28日発行
江戸遺跡研究会会報　No.100　江戸遺跡研究会
http://www.ao.jpn.org/edo/

◇江戸遺跡研究会第99回例会は、2005年３月16日(水)午後6時30分より江戸東京博物館学習室に◇
◇て行われ、追川吉生氏より、以下の内容が報告されました。◇

東京大学本郷構内の遺跡　地震研究所総合研究棟地点調査略報

追川　吉生
（東京大学埋蔵文化財調査室）

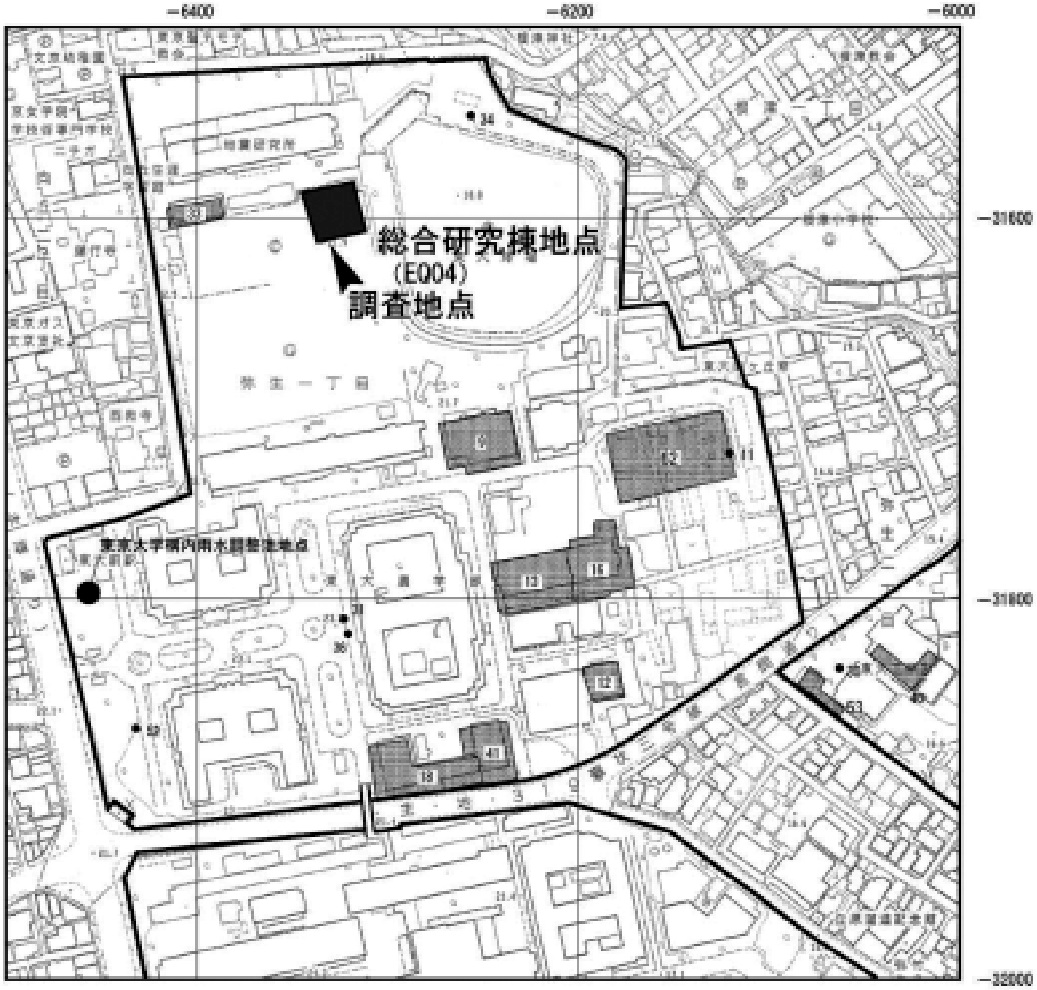
所 在 地　東京都文京区弥生1-1
調査期間　平成16年8月30日～平成17年2月28日
調査面積　1474.21㎡
調査担当　追川吉生　大成可乃

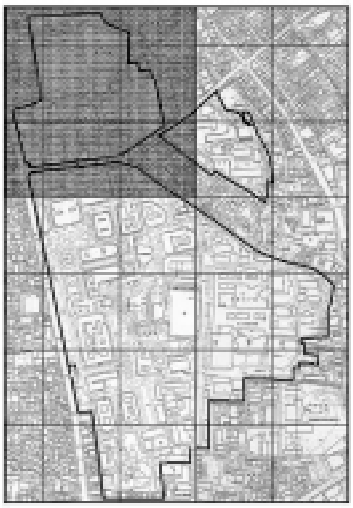
1. 調査の経緯

東京大学本郷構内は、江戸時代には加賀藩をはじめとした大名屋敷や旗本屋敷、御先手組屋敷、講安寺などが存在した。また付近一帯は、上部旧石器時代以降の複合遺跡である本郷台遺跡群として知られている。本学では1984年以降、構内施設の建設に伴う発掘調査を実施しており、その件数は既に60地点を越えている。

地震研究所ではキャンパス北側の、現在テニスコートとグランドとして利用している場所に、総合研究棟をPFI事業の一環として建設する計画を立案した（図１）。建設予定地は水戸藩中屋敷および安志藩下屋敷にあたる。通常の学内での施設建設に伴う発掘調査では、調査室が実施した試掘に基づいて調査計画を策定し、本調査を実施している。今回は諸般の事情によって試掘調査を経ぬまま、調査室を除いた本事業関連当事者間によって本調査の計画が策定され、調査室が調査を実施する運びとなった。しかしながら表土掘削の段階で、配管除去等の作業を通して遺跡の拡がりや生活面の重なりを看取することができた。最終的には調査室が必要と判断する期間・人員は確保して本調査を実施するに至った。

発掘調査は2004年8月30日から2005年2月28日まで、調査面積は1474.21㎡である。





9　農学部家畜病院
11　農学部ガラス室
12　農学部図書館
13　農学部校舎（7号館）（１期）
16　農学部校舎（7号館）（２期）
18　農学部総合研究棟（SK）
30　工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設
31　ATMネットワーク施設整備
33　地震研究所テレメタリング観測施設
34　グランド
36　農学部ガス管埋設
40　工学部全径間風洞実験室
41　ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー
52　農学部（21世紀館）木質ホール
62　農学部総合研究棟（NS01）

図１　調査地点の位置

2.確認された生活面

調査地点は明治時代以降、旧制第一高等学校用地として利用されていた。当該期の施設図を瞥見すると、付近は寮にあたるようである。その後、駒場に所在していた農科大学とキャンパスを交換して以降、本学農学部が主体となって調査地点一帯は利用されていた。

調査では江戸時代に5面の生活面を確認した。しかし調査区は北西から南東にかけての傾斜地に位置しており、特に調査区南側には埋没谷が存在していたため、一様な堆積状況ではない（写真1・図2)。今後調査地内各区で把握した生活面のそれぞれを、対照・比定していくことが課題である。本概報では便宜上新しい時期から1面、2面、3面、4面と呼称し、ローム面で確認し得た、江戸時代ではもっとも古い段階をローム面とする。また人力掘削中に盛土内より少なからぬ土器片や石器の出土をみていたが、江戸時代以前の明確な生活の痕跡を認めることはできなかった。旧石器時代についても同様で、数カ所のグリッドを対象に立川ローム第二黒色帯まで掘削したが、遺物の出土には至らなかった（図2内のグリッドが掘削したグリッドを表す)。

以下に各面での調査成果の概要を報告する。

写真1　埋没谷検出状況

（調査区南西隅から撮影）

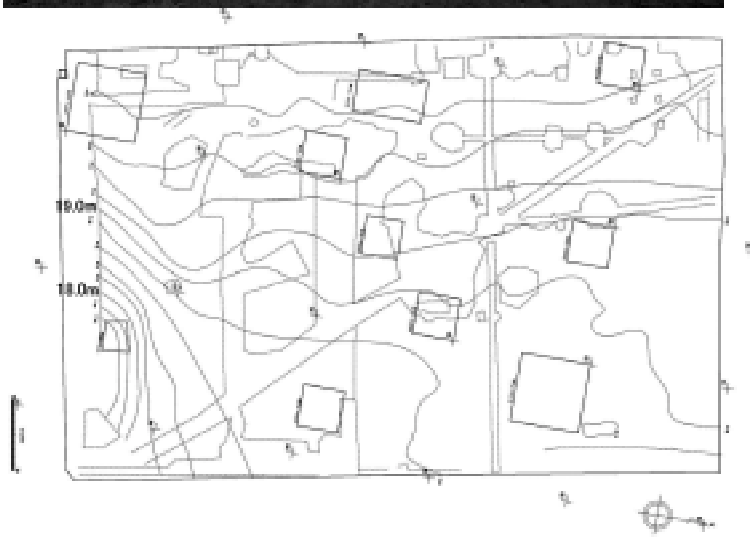


図2　ローム面検出状況

3.調査成果

3-1.1面の調査

1面は明治時代以降の影響が著しく、土坑とピットが数基検出されたのみである。

3-2.2面の調査

SX060

2面にはほぼ調査区全面にわたって焼土が認められた。SX60は深さ10cmの不定形の瓦溜まりである。そのすぐ南側や西側には炭化材の集中も見られた（写真2）。

写真2　SX60

SU095

入り口部分は150cm四方、深さ270cmを測る地下室（写真3）。本体は北に30cm、東と南に100cm程度のハング部分を有し、それぞれ高さ80cm。写真4は天井部を落とした状態であるが、西側に明かり取りのためと考えられる小穴が設けられていた。遺物は陶磁器片が数点出土しているにすぎず、時期を確定するまでには至っていない。

写真3(上)･4(下)　SU095

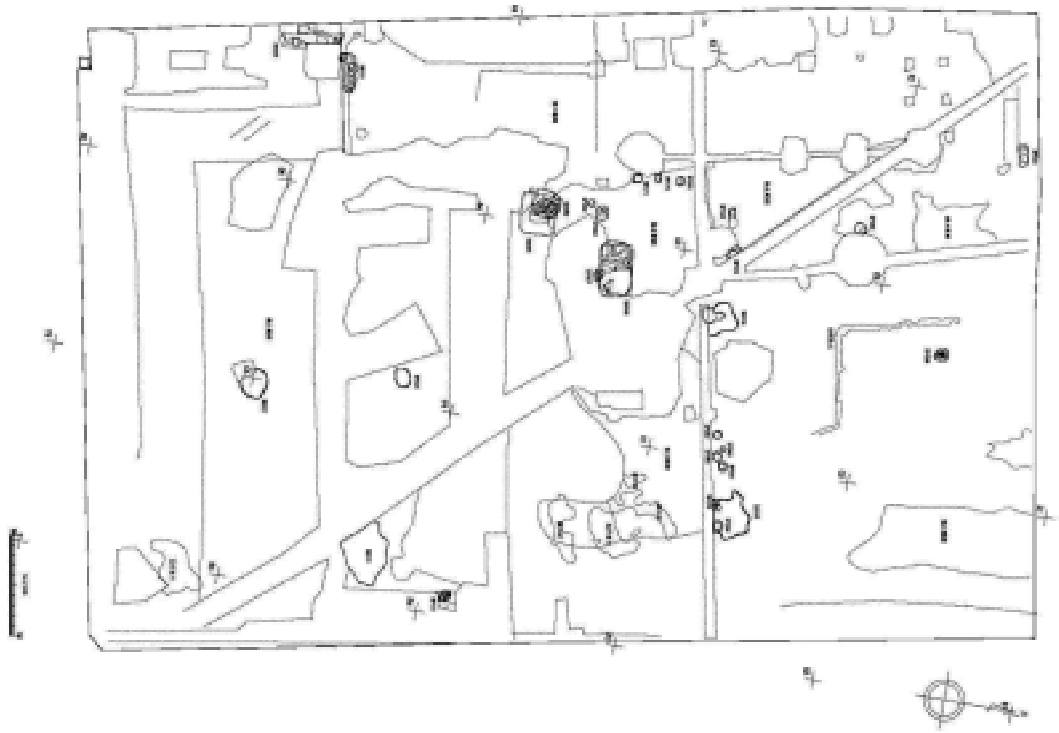


図3　2面の遺構分布状況

3-3.3面の調査

SD002・SD100・SD200

調査区の東側で、調査区を南北方向に縦断する石組みの溝である。使われている石は写真5のような間知石で、部分的に2段積まれていることを確認している。溝の底部には石は存在しない。掘り方は全体としては明瞭ではないが、その掘り込みが開始されている面と、土層断面の観察とから、この石組みの溝は３面の遺構であると認識している。また掘り込み内には胴木が設けられていたことがわかった。

溝の覆土には焼土が多く含まれていた。遺物は17世紀末から18世紀初頭にかけてのものが中心で、年代を判断する指標となろう。

溝は調査区やや北寄りから、一つはそのまま直進し、もう一つは北西側へと分岐する（SD100)。更にSD100はその方向を北へと曲げて（SD200)、最終的には調査区外へと延びている。SD100とSD200は楕円形の石によって構成されている。SD002は概して北から南へと傾斜しており、この傾向はSD100・SD200とSD002との関係においても看取される。現時点では、これらの溝は（若干の時期差はあるものの、生活面として把握する場合）ほぼ同時期であると考えられる。使用された石材の違いが何に起因しているかについては、現時点では明らかではない。今後の分析課題としたい。

SD002の中央部付近には、間知石の上に直径50-60cmの楕円形の石が据えられていた。一方、SD200を構成する楕円形の石の上には間知石が据えられた状態で出土している部分もある。あるいはSD002・SD100・SD200が一旦廃棄された後、改めて溝として利用されたのかも知れない。今後の作業において、遺物の年代をより詳細に分析していきたい。

写真5　SD002･100･200全景

礎石建物1

SD002の西側に隣接して、直径50-60cmの楕円形の石を礎石とした建物跡が検出された（写真6）。礎石は南北方向に100cm、東西方向に180cmの間隔で、軸をやや西に傾けた状態で並んでいる。周囲には夥しい焼土があり、この建物が焼失した際に崩落した壁土であったことを伺わせる。また写真7のような炭化した格子状の部材も一部出土している。ところで、礎石列の南側には焼けた瓦が集中して出土している部分がある。あたかも火災によってこの建物が南側へ倒壊したかのような出土状況を呈している。しかし検出した礎石を基礎に持つ建物に、瓦が葺かれていたかは即断を避けたい。なおこの瓦溜まり中からは、三階菱が刻印された瓦も出土した（写真8）。この家紋は安志藩小笠原家のものであり、調査地の土地利用の変遷を知る上で大きな手がかりとなる。

写真6　礎石建物1

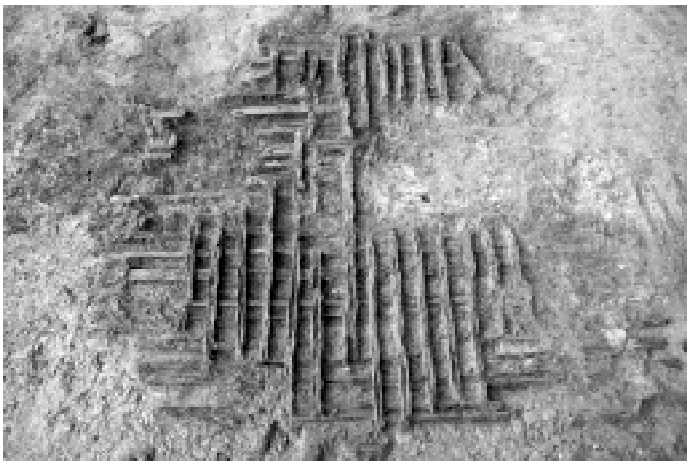


写真7　炭化部材検出状況

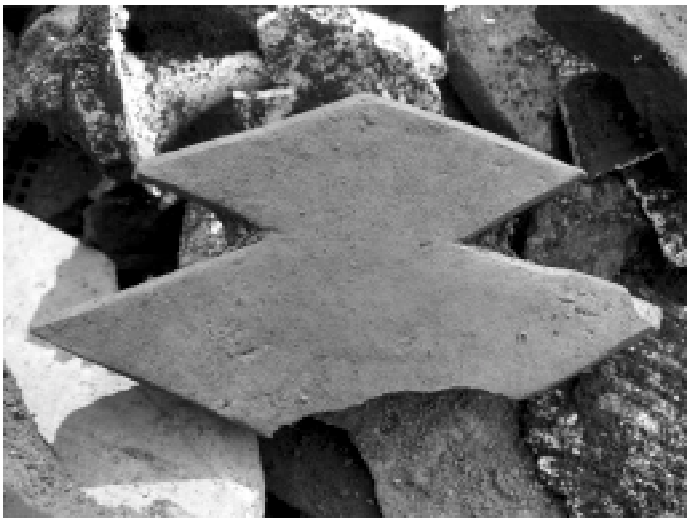


写真8　小笠原家の家紋が施された瓦

SR028・072・074・075

調査区を東西方向に走る道路と側溝。写真9のSR028東側で90度南に折れている。このSR028に南北方向に走る道であるSR072・074・075が交差する。

写真9　SR028(写真左が北)

礎石建物2

SR072の東側に、長径30-40cmの礎石列が南北に並ぶ（写真10)。その列の90cm西側には、それよりもやや小振りな礎石が同様に南北に並ぶ。礎石列の間隔は180cmである。道に面した礎石建物の基礎だろう。礎石に大小が認められることから、前者は建物本体の、後者は縁側の基礎であったかもしれない。道と礎石列との間には、焼土と瓦片が多く含まれている、幅15-20cm程度の溝がある。小振りの礎石を縁側の礎石と考えるならば、これは雨落ち溝になろう。

同様の建物は、この東側、SR074を挟んだ場所からも検出された。更にSD002に隣接する礎石建物１もある。道に画されるように長屋が数棟立ち並ぶという該期の景観を伺うことができる。

写真10　礎石建物2

SU157

長軸200cm、短軸300cm、深さ200cmの直方体を呈する地下室（写真11）。カワラケが床面付近に集中して出土している（写真12）。他に漆椀（塗膜のみ）が1点出土した。この地下室には確認面から40cm程度下の部分から、南北方向に間知石が据えられた状態で出土した。その周囲には粘土が貼られており、地下室埋没過程にみられる中央部の凹の平準化を試みているようにも見受けられた。詳細は不明である。

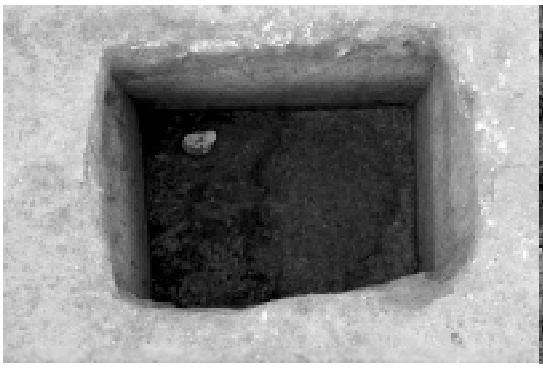


写真11　SU157

写真12　カワラケ集中部

SU180

西側の地下室本体は平面が200cm四方、深さ180cm。その東側に平面形状は東辺を壊されているため不詳だが、深さは150cmとやや浅い地下室が設けられている。地下室本体へのアプローチ部分と考えられる（写真13）。

写真13　SU180

SU425

南北370cm、東西340cmの地下室で、西側に更にもう一つ部屋を有する。西側の部屋への入り口部分には礎石が2つ据えられていた。地山とは別に天井が設けられていたかもしれない。この地下室では陶磁器・土器が出土したほか、多量の食物残滓も出土している（写真14）。

写真14　SU425

SE035

掘り方の直径200cm、本体の直径90cmの井戸。全体で10m程度掘り下げ、井戸枠を確認したが、湧水点までには至らなかった（写真15）。漆器椀（破片）ほかの出土がある。

写真15　SE035

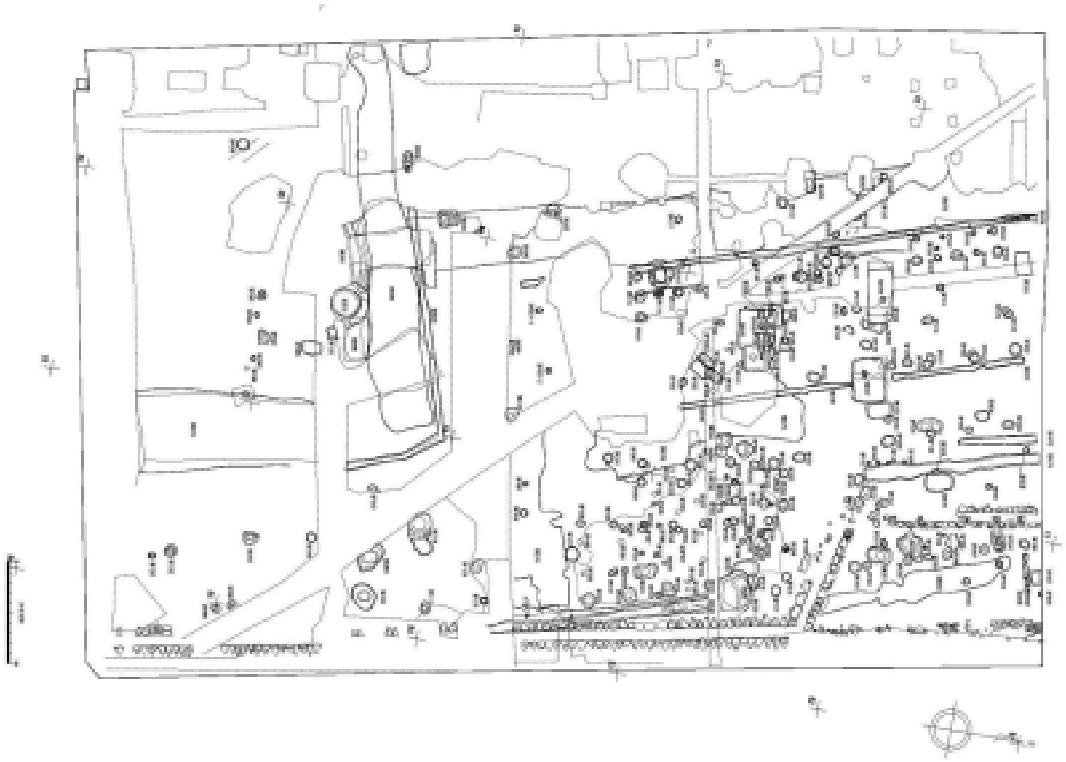


図4　3面の遺構分布状況

3-4.4面の調査

塀跡

調査区の北東側で検出されたピット列。ピットはそれぞれ直径50-60cm、深さ80-100cmで、南北方向に150cm間隔で並ぶ（写真16)。しかしその東西方向のどちらにも、このピット列と対になるような列は検出されなかったので、建物の柱穴と考えるよりは、塀の基礎と考えられる。南北に並ぶピット列には1基おきに、西側に同サイズのピットが切り合って検出された。これは塀の控えであったと思われる。

写真16　塀跡検出状況

SU209

調査区の南側には、東西方向に並ぶ地下室が6基検出されている。その一つであるSU209では、写真17のようにカワラケが13枚重なった状態で出土した。重ねたまま捨てたのだろうか。カワラケの廃棄時の様相を考える上で興味深い事例である。

写真17　SU209カワラケ検出状況

3-5.ローム面の調査

建物

直径50-60cmのピットが写真のように、南北方向に約360cm、東西方向に約180cmの間隔で並んでいる（写真18)。全体の規模は詳らかではないが、建物の基礎であると思われる。礎石を全く伴わないことから、掘建柱による建物であることが想定される。

このピット列の西側には南北方向に延びる溝がある。この溝よりも西には南北方向に地下室が並んでいる。建物基礎のピット列が検出された溝の東側とは様相が些か異なっている。

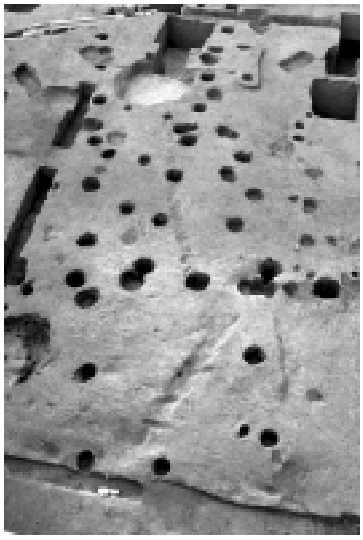


写真18　建物の柱穴

SU212・SU665

いずれも出入り口の形状は150cm四方の正方形で、SU212（写真19左）は北・西・南にそれぞれ100cm程度のハング部を持つ、深さ160cmのフラスコ状の地下室。一方SU665（写真19右）は北・東・南にそれぞれ100cm程度のハング部を持つ、深さ150cmのフラスコ状の地下室（写真は何れの地下室も天井部分を掘削している）。SU212では陶磁器・土器の他に、貝や魚骨などの多量の食物残滓が出土しており、分析が待たれる。SU665では陶磁器、瓦片が数点出土するに過ぎない。

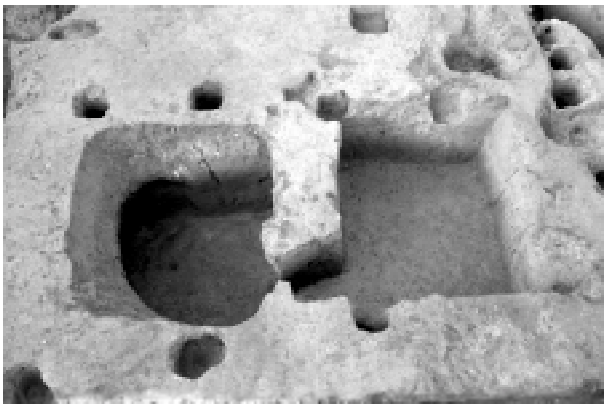


写真19　SU212(左)・SU665(右)

図5　ローム面の遺構分布状況

4.調査の課題

従来、本調査区の位置する農学部周辺（本郷構内ではあるが、これを弥生キャンパスと呼ぼう）は、埋蔵文化財調査がほとんど実施されてこなかった部分にあたる。その少ない事例の一つである地震研究所テレメンタリング地震観測施設地点（図1参照）は、本調査区の西側わずか20mしか離れ

ていないにもかかわらず、遺跡のあり方は大変異なっている。即ち、テレメンタリング地震観測施設地点が現地表面から100cm程度でローム層が検出され、生活面もこのローム層に認められるに過ぎないのに対し、本調査区ではローム層が検出される深さは現地表面から180cmを測り、その間に5枚の生活面が認められるのである。ローム層までの深さが異なる点は、本調査区が南側の埋没谷に向かって傾斜していることに起因しよう。しかし生活面の多寡は何によるものだろうか。傾斜地では生活面が改められる都度、盛土による造成が繰り返されたのに対して、平坦地では地均しがなされるのみだからであろうか。

3面の礎石建物から検出された小笠原家の家紋の付いた瓦は、少なくとも3面段階での調査区の土地利用者が小笠原家安志藩であることを明らかにしている意味で貴重な遺物である。安志藩、水戸藩にかかわらず当該地点に当てはまる屋敷の絵図資料は公表されていないが、試みに安志藩下屋敷当時の江戸切り絵図を参照すれば、門の位置が西側にあることはわかる。であるとするならば、テレメンタリング地震観測施設地点は門と施設本体との中間に当たり、土地利用の度合いとしてはそれほど著しくなかったことも予想される。

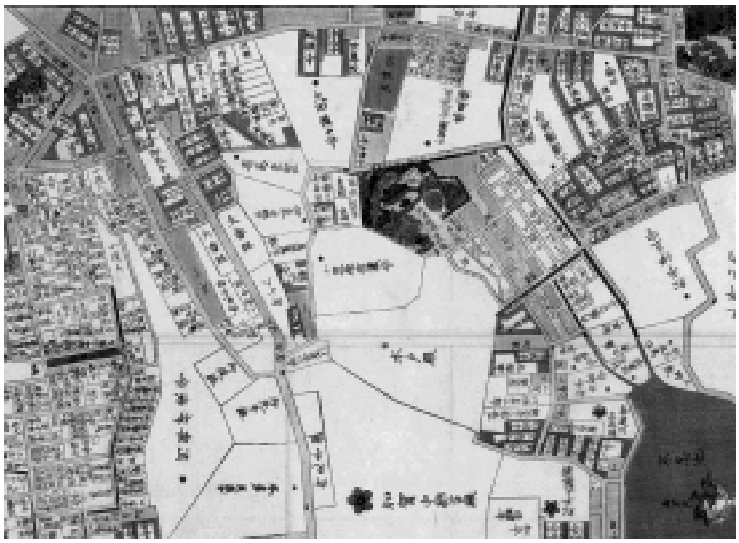


図6　江戸切絵図にみる調査地周辺（中央の小笠原家が本調査区にあたる）

今はまだ本調査区を巡る歴史的様相を復原するまでには至っていないが、それを明らかにすることが、弥生キャンパスでの土地のあり方を明らかにすることであり、とりもなおさず、今後の整理作業で我々に科せられた大きな課題に他ならない。

とはいえ再三繰り返すようだが、我々の弥生キャンパスでの調査は未だ端緒に付いたばかりである。3面の石組みの溝SD002他の構造を鑑みるにつけ、1万石の大名屋敷の下屋敷といったものに対する認識を新たにするばかりである。拝領した上屋敷が狭小な藩の場合、中屋敷・下屋敷に御殿空間の機能の一部を振り返ることもあり得るというのは、本学資料編纂所・宮崎勝美氏のご教示である。前に土地利用者と記したのは、拝領者と実際に利用していた者との関係についても、未だ検討の余地を有しているからである。

今回の調査によって本郷キャンパスの調査に、水戸藩・安志藩の藩邸が所在した弥生キャンパスに関する調査も本格的に加わった。上記の課題を見据えながら、今後の整理作業を実施していく所存である（追川吉生）。

参考文献

東京大学埋蔵文化財調査室　2004　「東京大学本郷構内の遺跡　地震研究所テレメンタリング地震観測施設地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

『江戸のミクロコスモス　加賀藩江戸屋敷』　　追川吉生著

東京大学・本郷キャンパスは戦火をまぬがれ、その後急激な再開発が行われなかったため、江戸時代の遺構が良好な状態でのこされていた。上は藩主から下は奉公人まで数千人は暮らしていたといわれる「江戸の小宇宙」加賀藩本郷邸の姿を考古学から明らかにする。

●新泉社刊・遺跡を学ぶ第11巻(ISBN-7877-0531-8)
●1500円

第100回例会のご案内

日　時：2005年５月18日（水）18:30～

内　容：**金子　智氏　（千代田区教育委員会）**
「千代田区丸の内一丁目遺跡の調査」

会　場：江戸東京博物館　第２学習室
（大階段北側の通路を東に進み、駐車場の脇を直進し、左側の夜間入口より入る）

交　通：ＪＲ総武線両国駅西口改札　徒歩３分
都営大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口　徒歩１分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室
03-5452-5103　（寺島･堀内･成瀬）
江戸遺跡研究会公式サイト
http://www.ao.jpn.org/edo/